

障がい児を同胞に持つきょうだいの適応に関する研究

石倉 健二¹⁾, 高島 恭子²⁾
豊島 律²⁾, 北山 沙和子³⁾

(¹⁾兵庫教育大学大学院臨床・健康教育学系
²⁾長崎国際大学人間社会学部社会福祉学科
³⁾佐賀県立嬉野高等学校)

要旨

近年、障がい児・者の家族支援の中でも、障がい児・者のきょうだいへの支援の必要性について指摘されるようになってきている。その背景にはきょうだいの抱える特別な心理社会的な問題についての認識がある。そこで今回は、きょうだいの自己に対する意識と社会的適応の観点から適応状況について調査を行った。その結果、学習面のコンピテンスについて兄弟群が弟妹群よりも自己評価が高く、自尊のコンピテンスについては女子よりも男子の方が自己評価は高かった。また、コンピテンス尺度や社会的望ましさ尺度への回答の中で、集団から大きくはずれる傾向をもつきょうだいもいた。こうしたことから、きょうだいへの支援は必要であるが、その考え方やアプローチは単一直線的なものや画一的なものではなく、きょうだい一人ひとりのよりよい発達を支援する具体的な提案が求められることが考察された。

キーワード

障がいのある同胞、きょうだい、コンピテンス、社会的望ましさ、支援

1. 問題と目的

障がい児・者の家族に対する支援の重要性は一般的に認識されるようになっており、近年ではその中でも障がい児・者の兄弟姉妹（以下、「きょうだい」と記す）の支援の必要性についても指摘されるようになってきている（広川 2006、S. L. Harris 2004）。

きょうだいの関係は、親（年長者）が子どもに対して何かを教えると言うような「タテ」の関係と、友達と一緒に遊んだりケンカをするような「ヨコ」の関係の両者を併せ持つ。そして最も身近な「他者」として学びあい、支えあい、影響しあうやや特殊な人間関係でもある。そして障がいのある子ども（以下「同胞」と記す）と暮らすきょうだいの場合、両親と同じくらいに長い時間をその同胞と過ごすことになる。また、親亡き後に同胞とかかわる可能性が最も高

いのもまたきょうだいである。そして、障がいのある同胞の存在によってその家族のあり方は大きな影響を受け、またその家族のあり方にきょうだいの日常生活も大きく左右される。このようなきょうだい直面する心理社会的な諸問題について柳澤（2007）は先行研究を紹介しながら次のようにまとめている。

①親が同胞を世話する時間が多くなり、親の注意が同胞に向きやすくなる。このことからきょうだいは孤独感を抱いたり、親の愛情を巡って障がいのある同胞といわば張り合うことに対する罪悪感を抱くことがある。

②親がきょうだいに対して同胞の世話や家事を課すことで、きょうだいは自分の時間を割かねばならなくなることから、憤りや不満の感情を抱いたり、親との関係に葛藤を感じやすくなる。

③きょうだいが自分の時間を同胞のために割かねばならなくなることは、きょうだい自身の家庭外での経験時間を少なくすることとなり、きょうだいの社会性や情緒の発達に影響を及ぼすこととなる。きょうだいはそうした状況にストレスを感じるようになり、その結果、きょうだいの心理社会的な問題へとつながることもある。

④自分も同胞と同じ障がいになるのではないかという過剰同一視や、障がいの原因を自己に起因させることによる罪悪感にもつながる可能性がある。また同胞を恥ずかしく感じるにより、様々な場面での心理的な葛藤を感じることが多くなり、同胞の困難な部分を自分が補わなければならないという心理的な圧力を感じることもある。さらに、親から過剰な期待を抱かれがちになる傾向も指摘されている。

筆者らも多くの障がい児・者やその家族に接してきた中で、きょうだいたちが発達上の心理的負担を過大に被ってはいないか、過剰適応の傾向にあるのではないか、あるいは様々な神経症症状に悩んでいるのではないかとといった心配をすることがある。また保護者が、障がいのある同胞とそのきょうだいの両者の育児に困惑する様子も経験している。

原・西村(1998)は障がい児を同胞に持つきょうだいの適応について、対照群も設けた大規模な調査を行っている。そこでは母親に、子どもの精神的問題が行動面に現れる場合によく見られるような特徴(自己破壊的傾向、親との対立、退行的不安、いさかい、非行、孤立など)やタイプA行動(競争性因子、攻撃・焦燥性因子)について質問している。さらにその子ども自身にも、自己に対する意識として自己有能感、心理的適応として抑うつと不安の程度、社会的適応として自ら社会的に認められる行動をとる傾向(社会的望ましさ)と孤独感について自己評価を実施している。障がいのある同胞がいることによって生じるきょうだいの適応状態について、このように行動面、自己意識、心理的適応、

社会的適応と広い観点から調査を行っている。その結果、きょうだいは対照群と比較して学業に関連するコンピテンス(有能感)が低く、社会的に望ましい方向に反応しようとする傾向が低いなど、幾つかの知見を示している。そこで本稿では、原・西村(1998)の調査の中で比較的是っきりとした結果として示されている自己に対する意識と社会的適応について追試する形で、きょうだいの適応状況について確認することを目的とする。

2. 対象と方法

(1) 調査対象

A県内の自閉症協会と肢体不自由児者父母の会の会合の際に、本調査の目的や内容、方法について説明を行い、調査の同意が得られた家庭に質問紙を配布した。同意が得られて、質問紙の回収ができたのは20名であった。きょうだい児は、小学校3年生以上中学生3年生以下である。

回答者の内訳は表1に示すとおりである。なお、一部の項目に欠損値がある回答も有効としたため、項目によっては合計が20名とならない場合もある。

表1 対象者一覧

		人数
障がい種別	自閉症協会	6
	肢体不自由児者父母の会	14
性別	男子	8
	女子	12
年齢区分	9歳(小学生群)	2
	10歳(小学生群)	4
	11歳(小学生群)	2
	12歳(小学生群)	5
	13歳(中学生群)	2
	14歳(中学生群)	4
	15歳(中学生群)	1
出生順位	同胞に対し姉妹	5
	同胞に対し弟妹	15

(2) 調査方法

質問紙への回答はきょうだい児自身の自己評価によるものとするが、小学校3・4年生の場合には、保護者が読み上げた質問にきょうだい児が答え、保護者が記入を行った。小学校5年生以上の場合には自記式とした。回答後は郵送による回収を行った。

質問紙の配布と回収は2007年8月～9月中に実施した。

(3) 調査項目

調査項目は以下のとおりである。

①基本項目：きょうだい児自身の性別、年齢、出生順位。障がいをもつ同胞や自分自身を含むきょうだいの総数、障がいをもつ同胞の出生順位。

②コンピテンス尺度

桜井(1983)の作成した「認知されたコンピテンス測定尺度(日本語版)」を用いた。下位尺度としては、「認知」「社会」「身体」「自尊」の4つがあり、それぞれ7つの質問から構成されている。それに対して、コンピテンスの高い反応のものから4、3、2、1点と得点化する。

③社会的望ましき尺度

桜井(1984)の作成した「児童用社会的望ましき測定尺度」を用いた。これは「社会的習慣に沿った行動・態度をいつもとる」「社会的習慣にそぐわない行動・態度を決してとらない」「社会的習慣によって容認されがたい行動・態度をときどきとる」という3種類の表現によって作成されている。回答はすべて「はい いいえ」形式で、社会的望ましきに反応した場合に1点、反応しない場合に0点となるよう得点化した。

3. 結果と考察

それぞれの評価尺度ごとに性別、年齢区分、出生順位別の平均値を求め、分散分析(Excel 2003を使用)を行った結果を表2～6に示す。またあわせて先行研究である原・西村(1998)

の調査結果から、障がい児の同胞を有しない小学校高学年・中学生の平均得点を同じ表中に()書きで示す。

(1) コンピテンス尺度(認知)について(表2)

今回の調査においては、性別と年齢区分の間には有意な差はなかったが、出生順位に有意差を認めた($F(1,16) = 4.03, p < .05$)。すなわち、同胞に対して兄姉群の方が弟妹群よりも認知面に関するコンピテンス(すなわちこの場合では学校での学習面について)が高いことがうかがえる。先行研究の対照群と比較しても、兄姉群は認知面のコンピテンス得点がかかなり高く評価されている。

先行研究である原・西村(1998)では、むしろ対照群の方が本得点は高い結果となっている。本調査の兄姉群の回答者数は3名と少なかったものの、いずれも小学校高学年で似たような評価パターンとなっていたことから、3名に共通する特徴をみることができる。

本尺度を作成した桜井(1983)によれば、中学生よりも小学生の方がこの認知面でのコンピテンスは高い傾向にある。しかしながら今回の分析では、単に小学生と中学生で分けただけでは有意差が示されなかったこととあわせて考えると、今回の調査対象者においては、認知面でのコンピテンスが高くなりやすい小学生である

表2 コンピテンス尺度(認知)の結果

		平均値	F 値
性別	男子 (n = 7)	17.99 (18.50)	0.00
	女子 (n = 11)	17.99 (16.45)	
年齢区分	小学生 (n = 13)	19.18 (18.68)	3.04
	中学生 (n = 5)	14.98 (16.27)	
出生順位	同胞に対し兄姉 (n = 3)	22.68 (17.87)	4.03*
	同胞に対し弟妹 (n = 15)	17.08 (17.09)	

平均値の上段は今回の調査結果
下段()内は先行研究の対照群

*: $p < .05$

という要因と、障がい児の同胞のいる兄弟であるという二つの要因が、高い自己評価となった背景にあるものとも考えることもできる。

いずれにしても本調査の対象であった兄弟は、認知面についてのコンピテンスをうまく伸ばしてきていることがうかがえる。

(2) **コンピテンス尺度(社会)**について(表3)

今回の調査においては有意な差は認められなかった。また先行研究の対照群と比較しても、目だった差のあるものは見られなかった。

表3 コンピテンス尺度(社会)の結果

		平均値	F 値
性別	男子 (n = 7)	21.42 (21.35)	1.85
	女子 (n = 11)	18.90 (19.48)	
年齢区分	小学生 (n = 12)	20.16 (21.10)	0.17
	中学生 (n = 6)	19.32 (19.73)	
出生順位	同胞に対し兄弟 (n = 4)	20.02 (20.00)	0.01
	同胞に対し弟妹 (n = 14)	19.88 (20.83)	

平均値の上段は今回の調査結果
下段()内は先行研究の対照群

(3) **コンピテンス尺度(身体)**について(表4)

今回の調査においては有意な差は認められなかった。

先行研究と比較した際、同胞に対して兄弟群の平均点がかなり低くなっている。回答者が少なかったことだけでなく、4名の回答者の中に極端に低い評価をした者が1名いたことにより平均値が下がったことによるものと思われる。

この児は、学習面では高い自己評価をしているものの、スポーツ面や友人関係面では自己評価が他のきょうだい児に比べて低くなっており、このアンバランスが際立っている。こうしたアンバランスさを抱えていると言うことは、何かしらの支援の対象となりうるものと考えられる。本調査では、このきょうだい児を特定す

ることはできなかったが、こうしたきょうだいの存在を確認できたことに、本調査の一つの意味がある。

表4 コンピテンス尺度(身体)の結果

		平均値	F 値
性別	男子 (n = 7)	17.99 (18.13)	0.35
	女子 (n = 12)	16.24 (15.92)	
年齢区分	小学生 (n = 13)	16.38 (17.72)	0.27
	中学生 (n = 6)	17.99 (16.33)	
出生順位	同胞に対し兄弟 (n = 4)	12.74 (16.63)	2.52
	同胞に対し弟妹 (n = 15)	17.99 (17.42)	

平均値の上段は今回の調査結果
下段()内は先行研究の対照群

(4) **コンピテンス尺度(自尊)**について(表5)

今回の調査においては、性別に有意差を認めた ($F(1,16) = 8.73, p < .01$)。すなわち、男子の方が自尊に関するコンピテンスが高く、女子の方が低いことがうかがえる。

本尺度を作成した桜井(1983)の結果でも、この自尊についてのコンピテンスは男子の方が高くなっており、今回の調査でもこうした性別的な特徴がよく現われたものと考えられる。た

表5 コンピテンス尺度(自尊)の結果

		平均値	F 値
性別	男子 (n = 7)	19.46 (17.19)	8.73**
	女子 (n = 11)	14.98 (16.75)	
年齢区分	小学生 (n = 13)	17.01 (18.40)	0.25
	中学生 (n = 5)	16.03 (15.53)	
出生順位	同胞に対し兄弟 (n = 3)	18.34 (17.54)	0.65
	同胞に対し弟妹 (n = 15)	16.38 (16.40)	

平均値の上段は今回の調査結果
下段()内は先行研究の対照群

** : $p < .01$

だし、児童・生徒のうちから自尊についてのコンピテンスに性差があることについては、桜井（1983）も詳細な検討が必要と述べるにとどまり、その背景については言及していない。

(5) 社会的望ましき尺度について（表6）

分析の結果、今回の調査においては有意な差は認められなかった。

しかし先行研究と比較した際、男子が高く女子が低くなっており、小学生が低く中学生が高くなっている。また、同胞に対して兄弟群が低くなっている。こうした先行研究での対照群とは異なる幾つかの結果が得られている。

社会的望ましき尺度は、一見、高得点である方がよい結果であるようにも見えるが、本尺度を作成した桜井（1984）によれば、「社会的に不利な状況にある子どもは、有利な状況にある子どもよりも、より社会的な是認を得たいがために、社会的望ましき得点が高くなる」ことがあることを述べている。そして、男子よりも女子の方が周囲の大人から社会的習慣に従うようにとの干渉（躰）が厳しく、その期間も長いであろうことから、女子の方が社会的望ましき得点が高くなりがちであると考察している。

こうしたことから考えると本調査対象者にあつては、女子よりも男子に、小学生よりも中

学生に、兄弟よりも弟妹に周囲からの干渉が多く、より望ましい方向に反応しているものとも考えられる。すなわち、周囲の大人がこうしたきょうだい達に様々な期待をかけているとも考えられる。

しかしながら、一方で本調査の回答者の中に、この社会的望ましきについて5点以下の極端に低い評価をした者が3名いた。このように集団から大きくはずれた傾向を持つ子どもの特徴に関しては、詳細な検討をする必要もあると思われるが、今回の調査では明らかにすることができなかった。

4. ま と め

本調査を通じて、きょうだいの発達とうまくいっている側面、アンバランスさが現われているきょうだい児の存在などを見ることができた。こうした状況を考えると、障がい児を同胞に持つきょうだいについての支援が必要であることは疑いがない。しかしながら、「障がい児を同胞にもつきょうだいであるから支援が必要」といった画一的な視点だけでは不十分な段階となっている。

高瀬・井上（2007）は、障がい児・者のきょうだい研究について概観した報告を行い、その中で今後のきょうだい研究の課題を以下の三点に整理している。

①きょうだいは「同胞から良い影響を受けたか - 悪い影響を受けたか」「適応的か - 適応的でないか」といった単一直線的な見かたではなく、きょうだい一人ひとりの経験を個別に丁寧に明らかにしていく視点が必要。

②きょうだいへの影響要因として明らかにされつつある「親の態度」についても、親がきょうだい児にどのような接し方をすればよいかを具体的に提案していくことが必要。

③きょうだいのアンビバレントな感情を全て否定的で画一的な考察をしたり、ストレスのもとにあるきょうだいをサポートしていくことだけを強調するのは控え、きょうだい一人ひとり

表6 社会的望ましき尺度の結果

		平均値	F 値
性別	男子 (n = 8)	14.50 (12.52)	2.14
	女子 (n = 10)	11.00 (13.78)	
年齢区分	小学生 (n = 12)	11.25 (13.68)	2.08
	中学生 (n = 6)	15.00 (12.62)	
出生順位	同胞に対し兄弟 (n = 4)	9.75 (12.95)	1.38
	同胞に対し弟妹 (n = 14)	13.25 (13.35)	

平均値の上段は今回の調査結果
下段()内は先行研究の対照群

のよりよい発達を支援する立場から、具体的なサポートのあり方を提案することが必要。

柳澤(2007)は、障がいのある子どもを取り巻く親やきょうだいを視野に入れたアプローチは、ICFにおける「環境因子」中の「支援と関係」を整えるものでもあることを指摘している。障がい児・者の「支援と関係」には兄弟姉妹や祖父母などの家族にとどまらず、親族、友人、知人、対人サービス提供者、専門職なども含まれてくる。そしてこれらは、障がいのある子どもとその家族が生活している地域の文化や社会資源などにも影響を受けるものである。これらを含んで広く「環境因子」を整えていくといった視点をもって支援や研究を行っていくことが近年の新たな動向に通じるものであるとも考えられる。

付記

本研究は、2007年度長崎国際大学人間社会学部社会福祉学科共同研究費によって行われたものである。本研究を実施するにあたり、ご協力いただいた自閉症協会および肢体不自由児者父母の会の関係者の方々に感謝申し上げます。

文献

- 1) 広川律子(2006)「障害児通園施設におけるきょうだい支援の実態について - 大阪府下の施設へのアンケート調査報告 -」『障害者問題研究』第34巻第2号, 74 - 79頁.
- 2) Sandra. L. Harris (1994) *Siblings of Children With Autism: A Guide for Families*. Woodbine House, Maryland. = 遠矢浩一訳(2003)『障害児のきょうだいのために - お母さんへのアドバイス -』ナカニシヤ出版.
- 3) 柳澤亜希子(2007)「障害児・者のきょうだいが抱える諸問題と支援のあり方」『特殊教育学研究』第45巻第1号, 13 - 23頁.
- 4) 原幸一, 西村辨作(1998)「障害児を同胞に持つきょうだいの適応に関する質問紙調査」『特殊教育学研究』第36巻第1号, 1 - 11頁.
- 5) 桜井茂男(1983)「認知されたコンピテンス測定尺度(日本語版)の作成」『教育心理学研究』第31巻第3号, 60 - 64頁.
- 6) 桜井茂男(1984)「児童用社会的望ましき測定尺度(SDSC)の作成」『教育心理学研究』第32巻第4号, 64 - 68頁.
- 7) 高瀬夏代, 井上雅彦(2007)「障害児・者のきょうだい研究の動向と今後の研究の方向性」『発達心理臨床研究』第13巻, 65 - 77頁.